

「ハガキを書けば
手に入らないものはない」

半田 坂田先生に初めてお会いしたのは、もう二十二年前になりますね。当時、私は尾道の小さな郵便局の局長でしたが、同じ広島県に郵便ハガキを「ハガキ道」として楽しんでおられる人がいると聞いていました。そしてお会いした時、先生は「ハガキを書けば手に入らないものはない」とおっしゃった。それまで自分が当たり前のように扱っていた郵便ハガキを一所懸命を通り越して、命を懸けて取り組んでいらつしやる。その姿にカルチャーショックを受けたのです。

坂田 いや、これは本当だよ。私はね、「複写ハガキ」を書けば手に入らないものはないなあと思っています。

半田 それからも一つ先生が言われたのは、郵便局の人はハガキを売るけど書く人はいないと。特に局長は書かないとはっきり明言されたので、そこまで言うなら私は書くかと思いついたのが私とハガキとの出会いでした。

坂田 私は森信三先生にハガキを教えられたでしょう。その時、郵便局の人が一番ハガキを書いていると思っていた。でも、書かないんですね。郵便局の人は配るのが仕事だからハガキは

書かないんだと諦めていた頃に半田さんに出会って、日本中の郵便局の中で半田さんだけが反応してくれた。だから、半田さんが私の「郵便局の人はハガキを書かない」という考えを塗り替えてくれたんですね。

半田 半田さんのハガキの特徴は書き手じゃない左手で書くんだよね。絵手紙だったり三行ハガキだったり、半田さんはとらわれていない。

坂田 最初、先生に「複写ハガキ」を教えたいただきましたが、いい加減な性格ですからハガキなら何でもいような気持ちになってしまつて(笑)。そういう点じゃあまりいい弟子じゃないですね。

坂田 半田さんが書かれるようになって、郵便局の人もずいぶん書く人が増えたと聞いています。

半田 それでもまだ少ないですね。一番身近にいる人が一番ハガキの素晴らしさに気づいていない。それが残念なんです。

坂田 郵便局の仕事で、保険や貯金の業務は利益を生み出すんですよ。ハガキの業務は手間ばかり食つて案外利益を生み出さないのではありませんか。

半田 年賀ハガキのシーズンには儲かりますが、普段はトントンですね。



向島西郵便局前局長
半田正興

はんだ・まさおき 昭和21年広島県生まれ。45年広島大学卒業後、郵便局に就職。61年坂田道信氏に会い、ハガキ道を始める。平成19年向島西郵便局長を最後に退職。著書に「はがきは人生を変える」(PHP研究所刊)などがある。

ハガキ道が 教えてくれた世界

たった一枚のハガキでも、書き続けられれば運命が変わる。自身の実験からそう力強く語るのはハガキ道伝道者の坂田道信さん。坂田さんと出会い、ハガキ道の世界に導かれた向島西郵便局前局長の半田正興さん。ともにハガキによって運命をひらき、いま悠々とハガキ道人生を楽しんでいるお二人の姿は、楽天知命そのものである。



ハガキ道伝道者
坂田道信

さかた・みちのぶ 昭和15年広島県生まれ。33年向原高校を卒業。農業のかたわら大工見習いとなる。46年森信三師と出会い、「複写ハガキ」に目覚める。現在はハガキ道伝道者として各地で講演活動に励みながら、地元広島で断食や玄米食など正しい食事のあり方の指導も行っている。著書に「ハガキ道に生きる」(致知出版社刊)がある。

◎対談 坂田道信&半田正興

坂田 ハガキは人と人を結びつける

ものだから、本当はたくさん利益を生み出すんですよ。保険でも貯金でも、もつとよりよくやろうと思つたら、もつとハガキを出せばいいんです。だから、郵便局の人にはもつともつとハガキに力を入れてほしいなあと思つてい

るんです。

生きた技術とは 友達をつくる技術

坂田 それにしても、小さな郵便局

で日本国中に影響を与えたという点では、半田さんが日本一じゃないかと思

っているんですよ。確か局長は三人くらいしかおらんかったよね。

半田 はい。私を含めて三人です。

坂田 地方の小さな郵便局の局長でも、半田さんのことは日本中の郵便局の人が知っていますよ。『朝日新聞』の「天声人語」でも紹介されたし、郵政省

からも提言を求められたりね。それから、「はがきびとの集い」も半

田さんの郵便局から始まつて、全国で同じような集いをやられるところが増えましたね。あれはもう何年になりますか。

半田 平成八年からですから、今年で十二年目になります。もともとは坂田先生が始められた「ハガキ祭り」に参加して、地元尾道でも同じような集いをやりたいなと思つたのがきっかけでした。ハガキで集まる人はいいですね。気持ちがオープンで温かい人た